

事業の名称

ラムサール条約登録予定湿地 涸沼のワイズユース等に関する事業

〔事業責任者〕

(自治体等側)
茨城町・町長 小林 宣夫

事業テーマ：地域の教育力向上，地域環境の形成，
自治体との連携，学術文化の推進

(大学側)
教育学部・准教授 大辻 永

連携先

茨城町，NPO 環～WA

(その他，インタビュー先として茨城県生活環境部，大涸沼漁協，施設の提供として茨城県信用組合研修センター)

プロジェクト参加者

小林 宣夫 (茨城町・町長 担当：事業責任者)
柴 義則 (茨城町・副町長 担当：学官の連携)
江幡 甚一 (茨城町・総務企画部・部長 担当：国内実践教育演習)
横田 修一 (茨城町・新政策審議室・課長 担当：国内実践教育演習)
菅谷 康 (茨城町・みどり環境課・課長 担当：国内実践教育演習)
田口 真一 (茨城町・みどり環境課・環境グループ長 担当：国内実践教育演習)
郡司 孝紀 (茨城町・新政策審議室・新政策グループ係長 担当：国内実践教育演習)
平澤 文子 (NPO 環～WA・代表理事 担当：国内実践教育演習)
大和 幸生 (NPO 環～WA・副代表理事 担当：国内実践教育演習)
大畠 正平 (NPO 環～WA・監査役 担当：国内実践教育演習・里山活動)
西村 智訓 (NPO 環～WA・事務局長 担当：国内実践教育演習)
西村美果絵 (NPO 環～WA・理事 担当：国内実践教育演習)

平澤 淳子 (NPO 環～WA 担当：国内実践教育演習)

大辻 永 (教育学部・准教授 担当：事業責任者・国内実践教育演習)

田村 誠 (茨城大学・准教授 担当：国内実践教育演習)

石島恵美子 (茨城大学・准教授 担当：国内実践教育演習)

前田 滋哉 (茨城大学・准教授 担当：国内実践教育演習)

安島 清武 (茨城大学・技術補佐員 担当：全般及び合宿の補佐)

プロジェクトの実施概要

①プロジェクトの目的

(自治体等側)

平成 27 年 5 月にラムサール条約への登録が控えている涸沼について，涸沼の豊かさや恵みを再認識するとともに，登録へ向けての機運醸成を図り，登録後のワイズユース，まちづくり，観光等について，産学官民が一体となった取り組みを行い，住民や学生の参画の拠点として，また，環境学習や生活文化の伝承の場として，大学と共に地域を活性化することを目的とする。

(大学側)

茨城町と茨城大学は，古くから連携しており，その関係は，「涸沼臨湖実習実験所（開設：昭和 31 年 11 月）」以前に遡り，同所の研究業績集（昭和 30 年 - 昭和 42 年）も存在している。近年では，

本プロジェクトによる「茨城町の学校統廃合に対する支援事業」や人文学部市民共創教育研究センター(人文学部協定との平成25年1月23日締結)との連携による魅力再発見プロジェクトやさくらウォークの実施等を行ってきた。

茨城町は県央に位置し、豊かな自然に包まれ、平成27年5月には涸沼がラムサール条約に登録される。平成26年度の大学院科目「国内実践教育演習」のフィールドを茨城町に設定して実施することにより、受講者の地域参画意識、問題解決能力、コミュニケーション能力の向上を目的とし、これを通して、茨城町と本学との地域連携をさらに深める。

②連携の方法及び具体的な活動計画

(自治体等側)

現地調査への協力、先進登録地視察に係る段取り及び実施の一切、各種情報提供、関係団体と茨城大学との橋渡し、本プロジェクト実施に係る住民への周知等を行い、茨城大学とともに、地域の行政課題の調査研究を進め、これらの課題解決の実施に向けた施策立案等を行う。

・味わって知る涸沼の恵みプロジェクト

涸沼で獲れた魚介類を味わうことを通じ、環境の現状や涸沼漁業の実態を伝えるとともに、地域の生産物に依存してきた人間本来の生活スタイルを改めて思い起こすことで、地域の自然環境や生物多様性を守る重要性を再認識する活動を行う。

・ラムサール条約登録前の住民意識調査

ラムサール条約登録前の住民意識調査が行われていない。住民主体の行政を行う上から、意識調査を行う。

・ラムサール条約登録を見据えたバードウォッチングサイトのマップ作成

涸沼周辺の地図はすでにあるが、ラムサール条約の基である水鳥の観察に特化したマップは作成されていない。専門家や学生の力を借りて原案を作成する。

(大学側)

現地調査の実施、調査結果の分析、先進登録地

視察への参加、各種情報収集、関係団体と協議及び連携等を行い、茨城町に対して、地域の行政課題の調査研究の報告、これらの課題解決の施策立案に関する助言等を行う。

大学院授業「国内実践教育演習」を実施し、準備段階から茨城町職員、関係団体、大学教員の連携を深める。同授業を実施し、受講する大学院生が里山活動や、涸沼流域、行政、漁協等でのヒアリングを通して、涸沼の魅力に気付き、地域連携の意義や奥深さを感じ取る。

・平成26年9月15～17日 大学院サステイナビリティ学校教育プログラム「国内実践教育演習」の実施(現地調査)

・同 11月16日(日) 涸沼環境フォーラムでの学生発表の実施

③期待される成果

(自治体側等)

学生等若者に涸沼をはじめとした茨城町の魅力を喚起でき、町おこしの足がかりとして期待ができる。また、ラムサール条約登録前の住民意識のデータを得ることができる。さらに、バードウォッチング・マップの原案の提供を受けることができる。

(大学側)

「地域に根ざした総合大学」を目指した本学としても、ラムサール条約登録という茨城町にとって歴史的な出来事に学術機関として連携・協力できることは意義深い。

受講する大学院生の問題解決能力やコミュニケーション能力の向上という点でも意義があり、これを通じた地域連携を実施する。また住民を前にした成果発表を行い、成果に対する住民の声を直接享受することができる。

プロジェクトの実施成果

①活動実績

1) ホームページ

今年度の大学院科目「国内実践教育演習」については、冊子体の報告書をすでに作成し、ホーム

ページ上で公開している。

http://www.grad.ibaraki.ac.jp/gpss/event_topics/20150109.pdf

2) 合宿中での中間発表会

9月17日、合宿の最後に、宿泊先である茨城県信用組合研修センターにおいて、茨城町長や同教育長などの参加を得て、以下に述べる合宿中の成果を発表した(図1)。



図1 茨城町小林町長によるコメント

3) 大学院科目「国内実践教育演習」

日程をおって概要を記す。

平成26年9月15日(月)

NPO 環～WAの活動拠点において自然体験を行った(図2)。里山管理活動、簡易ペレットストーブの作製、間伐材ベンチの作製などである。なお、作製したベンチ(図3)は、水戸市立博物館の特別展「里山一人と自然がつながる未来へ」(2014年10月13日～11月16日)において展示された。茨城町潤沼自然公園キャンプ場でテント泊を行った(図4)。

平成26年9月16日(火)

専門を異にする大学院生が、それぞれの興味

と専門性を生かし、潤沼のラムサール条約登録に向けた住民の意識調査を行う班(「意識調査班」と、バードウォッチングに適した場所とそれを案内するためのマップやサインの原案を作る班(「マップサイン作り班」)の2班に分かれ、茨城町役場の方と現地を周り(図5)、行政、専門家、漁業関係者などにインタビューを行った。



図2 里山体験



図3 作製・展示された間伐材ベンチ



図4 潤沼自然公園でのキャンプ(茨城町職員の方々から多くの差し入れをいただいた)



図5 涸沼湖畔にて

夜は、茨城町内の茨城県信用組合研修センターのご厚意をいただき宿泊した。

平成 26 年 9 月 17 日 (水)

茨城県信用組合研修センターにおいて、合宿中の成果をまとめ、発表した (前掲)。

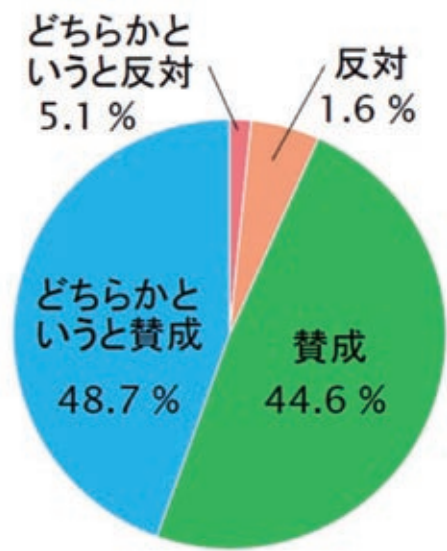
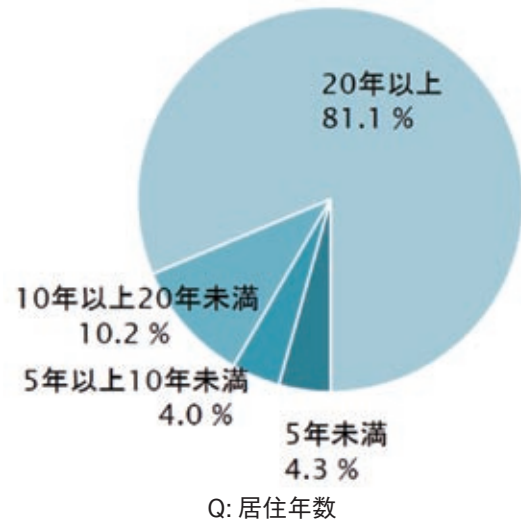
4) ラムサール条約登録前の住民意識調査

茨城県生活環境部、環境政策課及び環境対策課、さらに、大涸沼漁協においてインタビューを実施した。環境政策課は、条約登録の全般を担っている。環境対策課は「クリーンアップひぬまネットワーク」の事務局として、涸沼流域を対象に涸沼の水質向上を目指している。大涸沼漁協では、カワウが保護されることによって漁獲量に影響が出ないか、塩分濃度低下への懸念、増加が予想される観光客の遊漁料、しじみのブランド化などに懸念があることが明らかになった。

住民意識調査は、10月17日から30日の約2週間に実施された (合宿中はアンケートの原案を作成した)。町内の18歳以上の住民1000人を対象にアンケート用紙が郵送された (回答率37.1%)。詳細は、前掲のホームページ上で閲覧可能になっている。主要なものを以下に掲載する。

回答いただいた住民は、都市部に比べて居住年数が長いことが予想される。

涸沼のラムサール条約登録については、9割以上の住民が賛成、どちらかという賛成である。しかし、地元新聞や広報誌で周知しているにもかかわらず、PRの効果は高くない。期待される点や懸念される点が、それぞれあることがわかる。



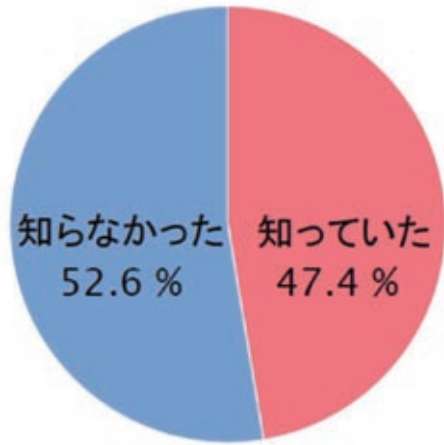
また、涸沼に対する愛着度やイベントへの参加経験など、課題が浮き彫りになった。

5) ラムサール条約登録に向けたバードウォッチング・マップづくり

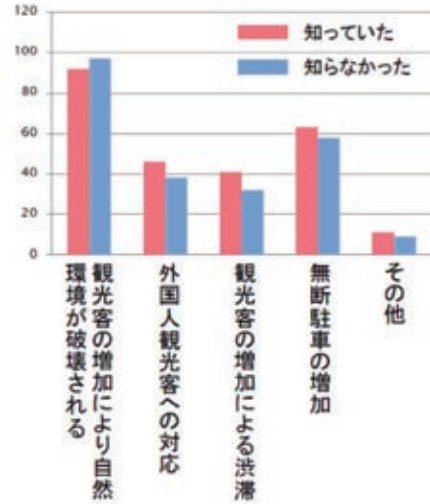
茨城県環境アドバイザーの山口萬壽美先生の協力を得て、実際のバードウォッチングを行い、涸沼の周囲を移動しながら素材を収集し、マップやサインを作製した (図6, 7, 8)。

6) 「ひぬま環境フォーラム」での活動報告

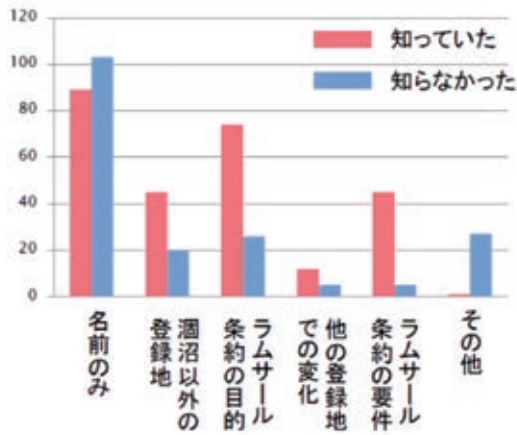
平成 26 年 11 月 16 日 (日), 「いこいの村涸沼」



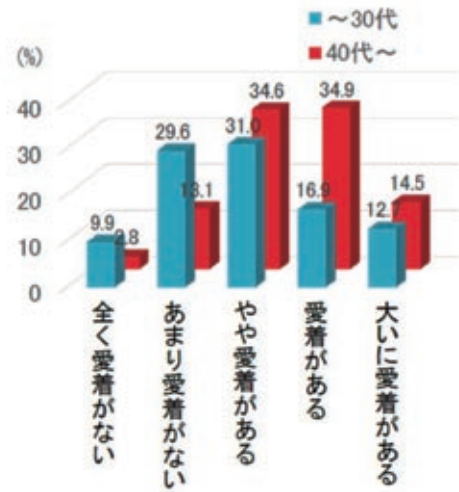
Q: ラムサール条約登録を知っていたか。



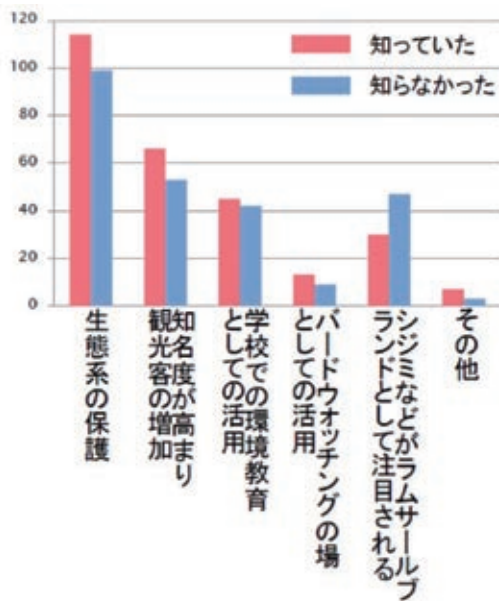
Q: 登録された場合懸念されること



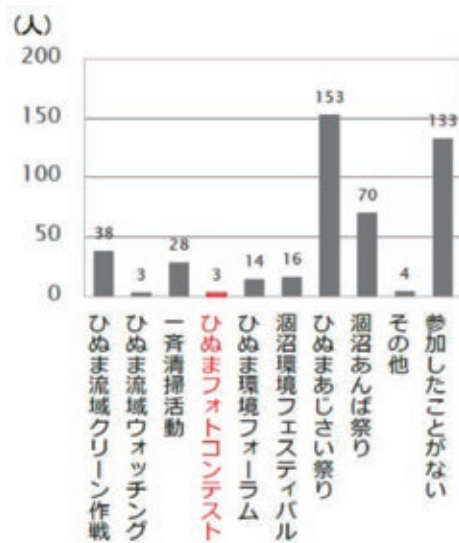
Q: 条約について知っていることは？



Q: 潤沼に対する愛着度



Q: 登録された場合期待されること



Q: 潤沼でのイベントへの参加経験

ラムサール条約とは？



1971年にイランの都市ラムサールで採択された条約で、正式名称は「特に水鳥の生息地として国際的に重要な湿地に関する条約」です。この条約は、湿地及びそこに生息する動植物の保全と、その適正な利用の促進を目的としています。

ラムサール条約の3つの性

- 1 保全・再生**
私たちの生活を支える豊かな生態系として、幅広く湿地の保全を呼びがしています。
- 2 賢明な利用（ワイス・ユース）**
産業や地域の人の生活とバランスのとれた保全を遂げるために、湿地の賢明な利用を推進しています。賢明な利用とは、湿地の生態系を維持しつつそこから得られる恵みを持続的に活用することです。
- 3 交流・学習**
湿地の保全や賢明な利用のため、人々の交流や情報交換、教育、認知、啓発活動を盛めることを大切にしています。

野鳥観察の心得

～やさしいきもち～

- 🌿 野外活動、無理なく楽しむ**
自然には、想わぬ危険が潜んでいます。知識とゆとりを持って、安全に行きましょう。
- 👁️ 観察は控えて、自然ほどの多さに**
自然があるがままの姿を見て世界を広げ、収穫することは積みましょう。
- 👂 静かに、そーっと**
距離は、大きな音や動作を避けします。小さな音や動きなど自然の音に耳を澄ませましょう。
- 🚫 一本道、道からはずれないで**
自然を避けるため、自然を壊すためにも道を外れないようにしましょう。
- 📷 写真を撮ろう、写真、動画、人への連絡**
写真撮影や動画、録音は周囲の人にストレスを与えることがあります。一人一人が十分配慮をお願いします。
- 🍵 帰って休もう、思い出とゴミ**
帰るを持って自分の心と大地を思い出しを待ちましょう。
- 👉 近づかないで、野鳥の巣**
美しい鳥の誕生です。巣の近くでの撮影は避け、遠くから見ましょう。

本マップは茨城県と茨城大学との積極的協働連携プロジェクトの一環で作成されたものです。
【お問い合わせ先】
茨城県 生活経済部 みどり環境課 TEL. 029-240-7105

ひぬまっふ





オオサジ
Haliaeetus pelagicus

全長が200cmもある大型の猛禽類。
1985年に国内を初回と繁殖地に指定された。



マガモ
Anas platyrhynchos

鴨の中で「アナー」とい「クワッ」と鳴く。マガモを家禽として飼育したものから来ている。



スズガモ
Ardeya naevia L.

スズガモの飛翔姿の美しさは沼沢のラムサール条約登録理由の一つとなっている。
全長は 40～60 cm 程度で、オスとメスで色に違いがある。



ヒラシシジャブ
Hirashin-jappa

冬に見られる鳥で、ササジの葉が特徴。沼沢公園でササジの葉を食べている姿が観察されている。



鯉公園

池が古い。古くからの景勝地。湖畔に突き出した「鯉沢の鼻」、一番は景勝の名勝になっている。故事園や水洗トイレが整備され、キャンプやバーベキューなども楽しめる。



鯉公園

「鯉沢の鼻」と向かい合う「赤天の鼻」につくられた公園。冬季には、オオサジなどの岸際に珍しい鳥類を見ることが出来る。



沼沢自然公園

沼沢が一望できる広い芝生の広場。子供向けの遊具のある広場など合計8つの広場がある。近くの宮前ではマガモを見ることが出来る。



大谷川河口

沼沢駅から徒歩で行ける距離にあり、主にスズガモを見ることが出来る。風が強い時は沼沢の東側に鳥が集まるので、特にオススメの野鳥観察スポットになっている。



キタノササギ
Agrostis japonica

日本で見られる最小の鳥。湖に特長的な鳥の個体がある。春によく見られる。



タグリ
Vandus vandus

成鳥には頭に黒い冠がある。警戒心が強く、「キュー」とキョーのような声で鳴く。



主な鳥類の観察できる時期（推定）

鳥種	春	夏	秋	冬
オオサジ				
マガモ				
スズガモ				
ヒラシシジャブ				
キタノササギ				
タグリ				
オオサジ				
マガモ				
スズガモ				
ヒラシシジャブ				
キタノササギ				
タグリ				
オオサジ				
マガモ				
スズガモ				
ヒラシシジャブ				
キタノササギ				
タグリ				

図6 作製したバードウォッチング用マップ（ラムサール条約や「野鳥観察の心得」についても掲載した。また、観察できるポイント以外に、見られる野鳥を写真や色分けで紹介した他、見られる時期についても示した）



図7 サインの設置場所（案）



図9 ひぬま環境フォーラム会場



図8 サインの例（そのポイントで見られる野鳥を絵で示し、トイレや駐車場の有無についても情報として含めている）

において「ひぬま環境フォーラム」が開催され、環境省の担当者によるラムサール条約に関する基調講演に続いて、「国内実践教育演習」での成果を発表した（図9）。データを分析したりマップを作っただけではなく、それを実際に地域住民に発表する機会を設けた。

なお、当日のフォーラムは、地元新聞でも取り上げられた（図10）。

②プロジェクトの達成状況

本プロジェクトは3年計画で実施している。授業と絡めた場合、受講生数が先読みできないことから、計画にあげたすべての項目を実施することは難しい。本年度は受講生が9名のみであり、住民意識調査とマップ作りに絞って実施した。いずれも、ラムサール条約登録前に達成されるべき事項として優先したものである。

茨城町との連携の下、住民1000人に対して調査を実施、分析し、具体的な数字をもって茨城



図10 ひぬま環境フォーラムを伝える記事「同大学院生は、茨城町の住民千人を対象に行った意識調査（回答率37.1%）などについて発表。条約登録に賛成が9割以上を占めた一方で、登録推進の動きや条約の内容について知らない住民が多いと指摘した。自然環境の保護や環境増加への期待が高まる反面、ゴミや無断駐車増加などを懸念する意見もあったと紹介した。」（茨城新聞2014/11/17）

町からの期待に応えることができた。回答率も37%と、この手の調査としては通常の回答率であった。ラムサール条約登録前の住民意識は、今でないと調査することができない。タイムリーに貴重な調査をすることができ、課題も浮き彫りにすることができた。

マップづくりについては、茨城県環境アドバイザーの山口萬壽美先生のご協力を得て、具体的なスポットや穴場を入れたものを作成することができた。提示した原案を下に、茨城町が印刷することになっている。

難しい条件の下、焦点をしばった質の高い地域貢献が達成できた。

③今後の計画と課題

2年目となる平成27年度も茨城町をフィールドとした「国内実践教育演習」を9月中旬に実施し、茨城町と本学との地域連携をさらに進めていく。具体的には、当初の連携計画にあった以下の側面について連携が考えられるが、前述のとおり、

テーマは受講生数やその専門にも左右される。

・ 涸沼周辺田んぼの多様性向上プロジェクト

(ラムサール条約に登録される涸沼周辺の田んぼの生物多様性向上を図るため、多様な取組みの受け皿となることを目指し、「ふゆみずたんぼ」の実施や「生物調査」等を行う)

・ 新たな恵み調査研究プロジェクト

(涸沼で採れるものの今まであまり食用としなかったマルタ、ニゴイ、外来生物で生息が確認されたホンビノスガイ、チャンネルキャットフィッシュ等の新たな資源についての食用について調査研究を行う。また、現在、そのまま湖岸に廃棄しているしじみ貝殻についての再利用についても調査研究を行う)

最後に、国内実践教育演習は、短期間ではあるが、受講生が大きく成長する場になっている。その機会を提供いただいた茨城町、ご関係の皆様、改めて感謝申し上げます。